

〔論 文〕

日本における中国語教育研究の現状と課題 —学会誌『中国語教育』の論文タイトルのテキストマイニングを通して—

Current Status and Issues of Chinese Language Education Research in Japan:
Through the text mining of article titles in the academic journal
“The Journal of the Japan Association of Chinese Language Education”

許 挺 傑¹

Xu Tingjie

キーワード：中国語教育、現状、課題、論文タイトル、テキストマイニング

1. 研究背景と目的

中国語教育の発展は、研究論文の蓄積と表裏一体であり、中国語教育に携わっている者であれば、「中国語教育」の現状のみならず、「中国語教育研究」の現状についても把握する必要があると考える。

特に、グローバル化が一段と進み、中国語教育に対するニーズが高まっている今日において、よりよい教育を提供するために、「中国語教育」と「中国語教育研究」の現状と課題について把握し、それらを踏まえたうえで行動を起こすことがますます必要となってくるであろう。

日本の中国語教育において、「中国語教育」の現状と課題については、比較的多くの研究が見られるが、「中国語教育研究」の現状については、あまり研究されていないのが実情である。そこで、本研究ではこの状況打破の第一歩として、日本の中国語教育研究分野において、最も中心的な役割を果たしている日本中国語教育学会の学会誌『中国語教育』の論文タイトルを対象に、テキストマイニングのフリーソフトであるKH Coderを用いて分析を行い、日本における「中国語教育研究」の現状と課題の一端を明らかにしたいと考える。

以下、第2節では先行研究について述べ、第3節では研究手法と研究対象について述べる。第4節では分析手順、及び結果と考察について述べ、第5節ではまとめと今後の課題について述べる。

2. 先行研究

第1節で述べたように、日本の「中国語教育」の現状と課題については、比較的多くの

¹ 大分県立芸術文化短期大学国際総合学科

研究が見られる。例えば、江戸時代の中国語教育に関して、六角・横山（1975）、安藤（1988）などがある。また、明治期から第二次世界大戦終結の期間における中国語教育は、六角（1984）に詳しい。さらに、輿水（2005）では、第二次世界大戦後から2000年初期の段階までの中国語教育の状況について述べている。また、最近の中国語教育に関しては、日本中国語学会中国語ソフトアカデミズム検討委員会編の『日本の中国語教育—その現状と課題・2002—』の内容が大変充実で、本の「はしがき」にもあるように、「日本の中国語教育についてはじめての大掛かりな公的調査」であり、日本の「中国語教育」の現状を知るうえで重要な文献である。

一方、日本の「中国語教育研究」の現状と課題については、あまり研究されていないのが実情である。そこで、本研究は学会誌『中国語教育』の論文タイトルに焦点を当て、日本における「中国語教育研究」の現状と課題の一端を明らかにしたい。

3. 研究手法と研究対象

3.1 研究手法

情報技術の発達により、従来は量的分析に適さないとされてきたアンケートの自由記述をはじめとするテキスト型データも分析されるようになってきた。その中で近年特に注目されているのがテキストマイニングという手法である。

本研究は、テキストマイニングのフリーソフトであるKH Coderを用いて、学会誌『中国語教育』の論文タイトルについて分析を行う。

KH Coderは、樋口耕一氏によって開発されたテキストマイニング用のソフトである。内部には、形態素解析用ソフトの「茶筌」や「MeCab」の他、統計計算とグラフィックスのための環境「R」も搭載されている。また、日本語のみならず、英語や中国語などの言語にも対応している。これだけの性能を備えているにも関わらず、だれでも無料で利用できるため、現在、テキストマイニングの分野において欠かせないツールの一つとなっている。2020年12月11日現在、KH Coderを使った研究調査が計4081件報告されており（<http://kncoder.net/>）、今後もこの数は増え続けると思われる。

また、学会誌における論文タイトルの分析について、佐久嶋ほか（2012）は学術論文の構造化されたデータの中で、最も端的に論文の内容を表わしているのが論文タイトルであり、そこに用いられている単語を時系列で分析することで、時代背景や特定学問の発展に伴った動向を把握できる可能性があるとして述べている。本研究も、このような問題意識に基づいた試みである。

3.2 研究対象

本研究の研究対象は学会誌『中国語教育』の論文タイトルである。具体的には2003年第1号から2017年第15号までの『中国語教育』に掲載されている論文のタイトルで、「特集論文」、「研究論文」、「実践報告」の3つのカテゴリー—計171本である²。

² 書評等は除外した。また、2003年第1号から2017年第15号までの15年分（15冊）を分析対象にしたのは、期間を5年ごとに3つのセクションに区切って分析できるためである。

「研究論文」と「実践報告」について、学会誌の執筆要領（2016年12月一部改訂）では、投稿原稿の種別を次のように定義している。

論文：先行研究を踏まえた独創性のある研究成果が、具体的なデータに基づいて論理的に述べられているもの。

実践報告：教育方法や教材開発など中国語教育に関する特色ある実践について、その目的、過程、成果などが、具体的かつ明示的に述べられているもの。

一方、「特集論文」は学会誌の執筆要領に特に記載はなかったが、これまでの実例を見ると、「特集論文」では、年次大会のシンポジウムの論文や招待講演・特別講演の論文等がまとめられている。以下では、この3つのカテゴリーをそれぞれ「特集」「論文」「実践」とする。

以下、データ整備と分析観点について説明する。

まず、データ整備についてである。はじめに、中国語教育学会のHPから論文タイトルのテキストデータをダウンロードし、分析用のエクセルファイルを作成した。使用言語が中国語であったもの（51本）は、日本語の要旨などを参考に日本語に訳し、分析に用いた。日本語訳は筆者以外の中国語教員1名にチェックを依頼した。以下【表1】は学会誌『中国語教育』における論文の基本情報である。

【表1】学会誌『中国語教育』における論文情報

年	号数	論文本数	特集	論文	実践
2003	第1号	5	0	5	0
2004	第2号	10	0	10	0
2005	第3号	10	0	10	0
2006	第4号	9	0	9	0
2007	第5号	14	8	6	0
2008	第6号	14	5	9	0
2009	第7号	10	0	10	0
2010	第8号	13	5	8	0
2011	第9号	11	4	7	0
2012	第10号	15	7	7	1
2013	第11号	8	4	4	0
2014	第12号	13	6	6	1
2015	第13号	16	6	8	2
2016	第14号	11	2	6	3
2017	第15号	12	3	7	2
合計	15冊	171	50	112	9

【表1】を見ると以下のようなことが分かる。

まず、第1号から第15号までの論文総数は171本であるが、そのうち、「特集」「論文」「実践」の論文数はそれぞれ50本、112本、9本である。最も多いのは「論文」であり、「実践」が最も少ない。また、第4号まで「特集」がなかったこと、第9号まで「実践」がなかったことなどから、学会の初期段階において、投稿論文に関して特に細かなカテゴリ設定をしていなかったことが伺える。

本稿では、1) 頻出語上位50語を観察し、全体の傾向を把握する、2) 2003年～2017年を5年ごとに3つのセクション（2003年～2007年論文数48本、2008年～2012年論文数63本、2013年～2017年論文数60本）に区切って、変化と特徴を観察する、3) 「特集」「論文」「実践」についてそれぞれの特徴を観察する、4) 年代とカテゴリ間を関係を観察するという4つの観点から分析するが、上記で述べたカテゴリ別の論文数の差やカテゴリ設定時期の差などを常に念頭に置いておく必要がある。

4. 分析手順、及び結果と考察

4.1 分析手順

ここでは、まずKH Coderを用いた分析の手順について説明する。

KH Coderの分析では、まずデータの中にどのような言葉が何回出現しているかを調べる。この点に関して、KH Coderは、形態素解析ソフトとして「茶筌」ないし「MeCab」を利用しているため、厳密には語ではなく、形態素を調査することになる。

また、KH Coderは、どの文章でも多い助詞・助動詞などを省いて、実質的に意味のある名詞・形容詞・動詞などを中心に抽出する。さらに、活用を持つ語は基本形に直して抽出するため、例えば、「多ければ」「多くて」といった記述がデータの中にあつた場合、KH Coderは「多い」という語が2回出現していたものと見なすことになっている³。

本研究の研究対象である論文タイトルには、専門用語が多く使用されている。そのため、それらの専門用語が「茶筌」によって細かく分解されすぎて、専門用語として抽出されないことを避けるため、分析の前に専門用語などを「強制抽出語」⁴として設定した【表2】。

また、「強制抽出語」の他、以下の言葉を「削除語」【表2】として設定した。

これらの語は、どの学術論文にも多く利用される用語で、例えば、「～を中心に分析をする」の場合、重要な語は「～」の部分であり、「中心」「分析」などの語は特徴がないため、削除することにした。最後に、特に出現頻度の高い同義語については、【表2】の「置換語」のように、頻度がより上位の語に統一した。

³ 詳細はさらに樋口（2004）を参照されたい。

⁴ 「強制抽出語」に関して、樋口（2004）では、ある語が2語に分かれていても、分析結果の解釈には支障がない場合も多いので、あまりこの部分に労力を割くことはお勧めしない。必要最小限の語を「強制抽出語」として指定しておき、分析を進める中でどうしても必要があれば「強制抽出語」を追加する程度がよいだろうと述べているが、本研究では、専門用語がきちんと抽出されることが必要であると考え、【表2】にあるように多くの語を「強制抽出語」として設定した。

【表2】強制抽出語と削除語と置換語

強制抽出語	必要性、可能性、書面語、論説体、ピア・リーディング、第二外国語、協働学習、也、母語話者、学習者、相違点、提示法、語用論、当然了、可能、了、把、センター試験、妥当性、単母音、有気音、無気音、破裂音、関連性、原語特殊講義、想、愿意、是、基本周波数曲線、概数詞、多、目的語、着、不、没有、社会人、閩南語、3×3+3、モデル、唐通事、訳詞長短話、東京異詞相集解、課本、動賓、検定試験、安定性、聴解、意味論、肯、在、空缺式、得、开、玩个痛快、忙得个不亦乐乎、一次、一趟、動量、初修、スキット、モデル、因为、所以、第3声、場面付き学習、外国語、協働、官話急就篇、急就篇、中間言語、朝鮮語、重读、重ね型、二重目的語、看看、我学习汉语在大学、我们七点去吧、地の文、着、还、再、文ストレス、除非、存現文、社会言語学、現象学、怎么、为什么、要不是、要是不、疑問詞、一边A一边B、NE、普通話、对、可、构造化輸入、没、刚、直接法、孔子学院、否定文、肯定文、誤答、類義、語法結構、HSK、賓語、領属、音韻カテゴリー、生素材、eテキスト、介詞、中国渡日児童生徒、第二外国語、受講者、習得、存在、21世紀、動機づけ
削除語	研究、する、試み、中心、分析、考察、例、対象、基づく、検討、みる、見る、看る、働き、年、いる、できる、及ぶ、向ける、考える、就、場合、つる、まとめ、もと、よい、よる、回、感じる、基、月、---cell---、的
置換語	発音・音声（「発音」に統一）、教学・教授・指導（「教学」に統一）、教材・教科書・教本（「教材」に統一）、方略・ストラテジー（「方略」に統一）、どう・いかに（「どう」に統一）、変わる・変る（「変わる」に統一）

4.2 結果と考察

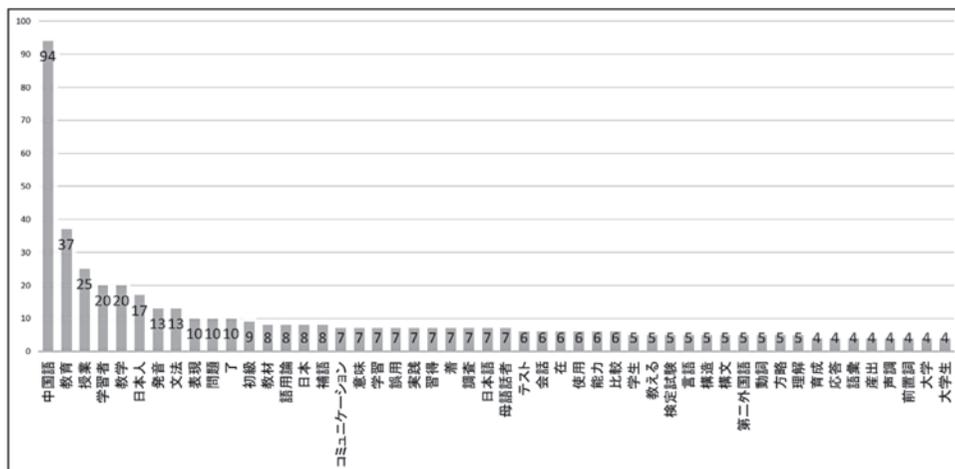
4.2.1 全体的な傾向

4.1節の手順に沿って、171本の論文タイトルを分析した結果、KH Coderによって抽出された語の総数は2170 (1073)⁵語であり、異なり語数は599 (479)語である。以下では、頻出語上位50語を観察し、全体の傾向を把握する。

【図1】は、最も多く出現していた頻出語50語を頻度の高い順に並べたものである。【図1】を見ると、以下のようなことが分かる。

まず、10回以上出現していた語は、「中国語94」「教育37」「授業25」「学習者20」「教学20」「日本人17」「発音13」「文法13」「表現10」「問題10」「了10」などである。学会誌『中国語教育』という日本の中国語教育に関する学術誌において、上記の語が多く出現していたことは、非常に納得できるものである。

⁵ 2170は分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ語数であるが、括弧内の1073は実際に分析に用いる語の数である。これは、KH Coderでは特に設定を変更しない限り、助詞や助動詞のようなどのような文章の中にもでも現れる一般的な語は分析から除外されるためである（樋口2004, p125）。



【図1】頻出語上位50語

この頻出語上位50語を観察すると、さらに以下のような特徴が見取れる。

まず、「文法項目」関係の用語として、「文法13」「了10」「補語8」「着7」「在6」「構造5・構文5」「動詞5」「前置詞4」などが多く出現している。

次に、「研究領域」関係の用語として、「発音13・声調4」「語用論8」「教材8」「コミュニケーション7・誤用7・実践7・習得7」などが多く見られた。

最後に、「その他」として、「授業25」「教学20」「テスト6」「会話6」「検定試験5」「方略5」「応答4」「産出4」なども多く見られた。

このように、頻出語上位50語を観察しただけでも、中国語教育研究の研究対象が非常に多岐に渡っていることが分かる。

4.2.2 時系列の特徴

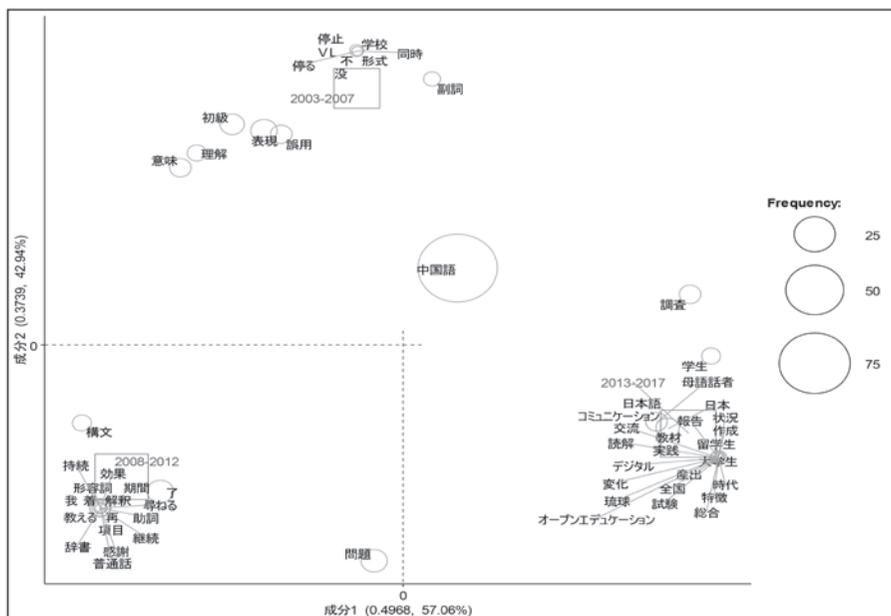
4.2.1では、頻出語上位50語を観察することによって、全体的な傾向を見たが、ここでは、時系列の特徴（5年ごとの特徴）を観察する。

【図2】は、KH Coderの「抽出語」→「対応分析」の機能を使って作成したものである。抽出語の選択（上位60語）においては、「最小出現数」を「2」に設定し、対応分析のオプションでは、「分析に使用するデータ表の種類」は「抽出語と外部変数（5年間）」、「集計単位」は「文」という形でそれぞれ設定し、得られた結果である。

「対応分析」では、出現パターンに取り立てて特徴のない語が原点（0,0）の付近にプロットされる。この【図2】では（0,0）の付近にある「中国語」がそれである。そして、原点からみて「2003年～2007年」、「2008年～2012年」、「2013年～2017年」の各方向にプロットされている語、それも原点から離れている語ほど、各セクションを特徴づける語であると解釈できるというものである。

まず、「2003年～2007年」の5年間では、「停止」「没」「不」「V」「L」などの「文法項目」関係の用語が特徴的であることが分かる。

例えば、「類義動詞“停”と“停止”の教育文法について—日本人学生を例に一」のように



【図2】 対応分析からみる各セクションの特徴

類義動詞の問題や「初級中国語学習者の認知的学習ストラテジー—“不”と“没（有）”の習得をめぐる—」のようにどちらも否定の意味を表わす「不」と「没」の語の習得を扱う論文などがその例である。

また、「副詞」「誤用」「初級」「理解」「意味」「表現」なども、「2003年～2007年」の5年間の特徴語であることが分かる。

一方、「2008年～2012年」の5年間では、「文法項目」関係の用語として「了」「着」「構文」「助詞」「形容詞」「持続」「継続」「再」などがある一方で、「教える」という言葉も特徴的である。また、「感謝」「尋ねる」といった「社会言語学的・語用論的」なものを取り扱う論文も出現していることが見て取れる。

例えば、「“了”をいかに教えるか」「中国語学習者の「ほめ」に対する応答における中間言語語用論研究」「感謝に対する応答の社会言語学的考察—「道を尋ねる」場面を中心に—」のような論文がその例である。

では、「2013年～2017年」の5年間はどうであろうか。

【図2】の「2013～2017」方向にプロットされている語を観察すると、「文法項目」関係の用語はあまり見られず、その代わりに「実践」「コミュニケーション」「交流」「デジタル」「動機」「留学生」などの語が目立つ。

例えば、「異文化間コミュニケーション能力養成を目指す—留学生と学ぶ中国語会話授業の実践—」「オープンエデュケーション時代に教室活動すべきこと—モチベーションを高める留学生交流会—」「教育コンテンツのデータベース化とオープンエデュケーション」「デジタルで授業を豊かに！—繰り返し練習：TTSと中国語音声入力、音が出てゲームもできる単語カードQuizlet—」などがその例である。

「2013年～2017年」の5年間は、「文法項目」そのものよりも、「コミュニケーション」関係の語や「情報技術と教育」関係の語などが多く出現していたことが特徴的であると言えよう。

また、各セクションの関係について、【図2】の寄与率の高い成分1、すなわち左右の位置関係に注目すると、「2003年～2007年」の5年間と「2008年～2012年」の5年間はどちらも左側に位置し、「2013～2017」の5年間だけ右側に位置していることが分かる。このことは、「2003年～2007年」の5年間と「2008年～2012年」の5年間の内容は比較的似通っていたのに対して、「2013年～2017年」の5年間の内容はそれらとはやや異なっていたことが伺える。

上記で述べたことを次のようにまとめられよう。

中国語教育研究は時代の流れとともに、文法研究を起点にして、誤用関係、習得関係、社会言語学・語用論関係、コミュニケーション関係、教育と情報技術関係など、徐々に研究の裾野が広がっていったことが分かった。

また、「2003年～2007年」の5年間と「2008年～2012年」の5年間の内容は比較的似通っていたのに対して、「2013年～2017年」の5年間の内容はそれらとはやや異なっていたことも明らかになった。

4.2.3 カテゴリー別の特徴

4.2.2では時系列の特徴を見たが、ここではカテゴリー別の特徴を観察する。

4.2.2と同じように、KH Coderの「抽出語」→「対応分析」の機能を使って、各カテゴリーにおける特徴語の2次元散布図を作成した【図3】。抽出語の選択は「上位60語」で、「最小出現数」を「2」に設定し、対応分析のオプションでは、「分析に使用するデータ表の種類」は「抽出語と外部変数(カテゴリー別)」、「集計単位」は「文」という形でそれぞれ設定し、作図を行った。

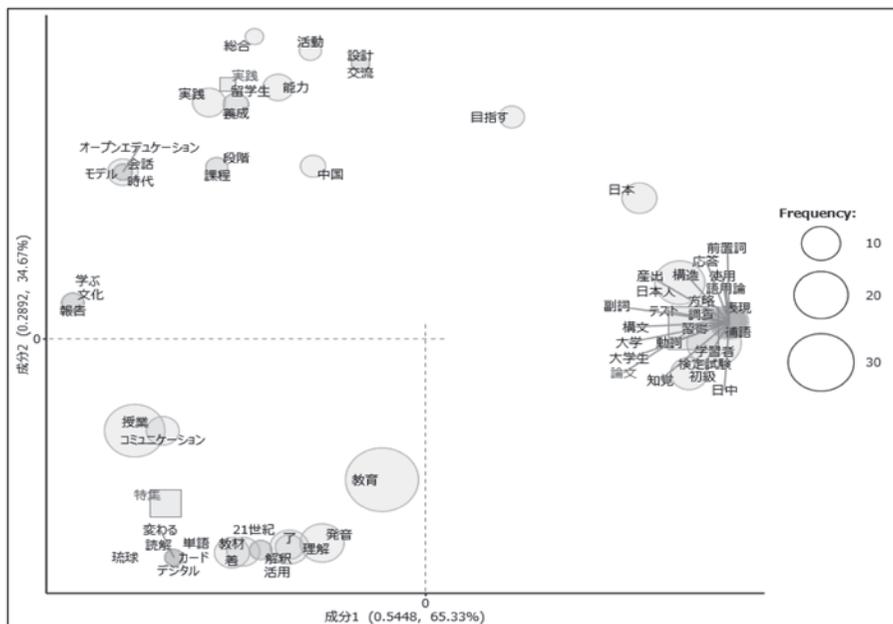
まず、「特集」の特徴語を観察してみよう。「特集」では、「教材」「単語」「カード」「デジタル」「活用」など、「教材とその活用」に関する語が多く集まる一方で、「了」「着」「解釈」などの「文法項目」関係の語も存在する。また、「世紀」や「コミュニケーション」などの語も特徴的である。

例えば、「21世紀の中国語教育を考える—グローバル社会を生きる人材を育てるという視点から—」「中国語の“着”の文法的意味及び関連現象の認知類型論的解釈」「“了”の習得状況調査及び教学方略について」「デジタルの導入で授業は変わるか—第11回全国大会ワークショップまとめ—」などがその例である。

次に、「論文」の特徴語を見てみよう。「論文」では、「補語」「表現」「構文」「分析」「使用」「構造」「動詞」「助詞」のように、「文法項目」関係の語が非常に豊富であると同時に、「検定試験」や「テスト」のように「試験」関係の語もある。また、「研究領域」としての「習得」や「語用論」などの語も目立つ。

例えば、「“看”と“看看”から動詞重ね型の用法の検討」「日本人中国語学習者による「補語」表現の習得研究」「中国語検定試験3級テストの聴解問題について」「中国語の呼びかけ語の語用論的機能について—出合いのあいさつを中心に—」などがその例である。

最後に「実践」の特徴語を見ておこう。「実践」では、「実践」「能力」「養成」「総合



【図3】対応分析からみるカテゴリー別の特徴

「活動」「交流」「設計」「時代」「会話」「オープンエデュケーション」などの語が特徴的である。やはり、いわゆる「実践」報告らしい特徴語が多く含まれているといっても過言ではない。

例えば、「コミュニケーション力と協働力の育成をめざして—高校中国語教育での実践報告—」「3×3+3」モデルに基づいた中国語教育—総合学習活動の試み—「会話スキットの発表を通しての日本人学生の中国語口頭能力の向上—愛知県立大学中国語の会話授業を例に—」「異文化間コミュニケーション能力養成を目指す—留学生と学ぶ中国語会話授業の実践」などがその例である。

このように、「特集」「論文」「実践」の各カテゴリーにおいて、それぞれ異なる特徴語があることが明らかになった。

また、各カテゴリーの関係について、【図3】の寄与率の高い成分1、すなわち左右の位置関係に注目すると、「特集」と「実践」はどちらも左側に位置し、「論文」だけが右側に位置していることが分かる。このことは、「特集」と「実践」の内容は比較的似通っていたのに対して、「論文」はそれらの内容とはやや異なっていたことが伺える。

4.2.4 年代とカテゴリーの関係について

これまでの分析からも分かるように、中国語教育研究はその対象が多岐にわたっており、また、時系列的に文法研究を起点にして、誤用関係、習得関係、社会言語学・語用論関係、コミュニケーション関係、教育における情報技術関係など、徐々に研究の裾野が広がっていった。しかし、問題は時系列上の研究の裾野の広がり具体的に「特集」「論文」「実践」の3カテゴリーとどう関係するかという点である。そこで、ここではKH Coder

では、「実践」と「特集」の特徴語は、それぞれどのようなものがあったらうか。

「実践」では、「実践」「能力」「養成」「総合」「活動」「交流」「設計」「時代」「会話」「オープンエデュケーション」などの語が特徴的である。

「特集」では、「教材」「単語」「カード」「デジタル」「活用」など、「教材とその活用」に関する語が多く集まる一方で、「了」「着」「解釈」などの「文法項目」関係の語も存在する。また、「世紀」や「コミュニケーション」などの語も特徴的である。

これまでも述べたように、中国語教育研究はその対象が多岐にわたっており、また、時系列的に文法研究を起点にして、誤用関係、習得関係、社会言語学・語用論関係、コミュニケーション関係、教育における情報技術関係など、徐々に研究の裾野が広がっていった。

しかし、【図4】と上記の分析を見ると、次のようなことが見えてくる。

「コミュニケーション」関係、「教育における情報技術」関係の論文が急激に増えたのは「2013～2017」の5年間（【図2】）であり、これも主に「特集」と「実践」という2つのカテゴリにおいて生じた変化（【図4】）であった。このことは、逆に言うと、今回の分析対象論文171本のうち、全体の65%を占めている「論文」（112本）というカテゴリにおいて、文法研究を起点にして、誤用関係、習得関係、社会言語学・語用論関係まで研究の裾野は拡大したものの、「コミュニケーション」関係と「教育における情報技術」関係などの領域にまで十分な広がりを見せていないことを意味しているのかもしれない。

「特集」「論文」「実践」について、そもそも「カテゴリ」の目的や性質が異なるため、【図4】において、それぞれ離れた位置に布置されるのはある意味当然のことである。また、研究の内容や方法、対象によっては、「論文」になりやすい研究と「実践」になりやすい研究もあるかもしれない。実際に「コミュニケーション」関係や「教育における情報技術」関係の研究は、「論文」よりも「特集」と「実践」のカテゴリに多く現れている。

一方で、中国語教育において、コミュニケーション能力育成の重要性が叫ばれるようになって久しい。学習者のコミュニケーション能力を高めるためには、ケーススタディの性質が強い個別の「実践」報告も重要であるが、より普遍性が高く、一般化ができる「論文」というカテゴリにおいて、学習者の「コミュニケーション」能力に関係する研究も増やしていく必要があるかもしれない。

5. まとめと今後の課題

本研究では、1) 頻出語上位50語を観察し、全体の傾向を把握する、2) 2003年～2017年を5年ごとに3つのセクション（2003年～2007年論文数48本、2008年～2012年論文数63本、2013年～2017年論文数60本）に区切って、変化と特徴を観察する、3) 「特集」「論文」「実践」について、それぞれの特徴を観察する、4) 年代とカテゴリ間の関係を観察するという4つの観点で、『中国語教育』2003年第1号から2017年第15号までの171本の論文タイトルについて分析を行った。その結果、以下のようなことが明らかになった。

1) 中国語教育研究の分析対象が非常に多岐にわたっている。

2) 中国語教育研究は時代の流れとともに、文法研究を起点にして、誤用関係、習得関係、社会言語学・語用論関係、コミュニケーション関係、教育における情報技術関係など、徐々に研究の裾野が広がっていった。また、「2003年～2007年」の5年間と「2008年～2012年」の5年間の内容は比較的似通っていたのに対して、「2013年～2017年」の5年

間の内容はそれらとはやや異なっていた。

3) 「特集」「論文」「実践」の各カテゴリーにおいて、それぞれ異なる特徴語がある一方で、3つのカテゴリー間において、「特集」と「実践」の内容は比較的似通っていたのに対して、「研究」は、それらの内容とはやや異なっていた。

4) 「実践」・「特集」はそれぞれ「2013年～2017年」・「2008年～2012年」と強い関連性を持っており、それぞれの開始時期が大きく影響している可能性を示唆する結果となった。一方、「論文」は創刊号の2003年から2017年までであるが、最初の5年間「2003年～2007年」と最も強い関連性を持っていた。このことから、今回の分析対象論文171本のうち、全体の65%を占めている「論文」(112本)というカテゴリーにおいて、文法研究を起点にして、誤用関係、習得関係、社会言語学・語用論関係まで研究の裾野は拡大したものの、「コミュニケーション」関係と「教育における情報技術」関係などの領域にまで十分な広がりを見せていない可能性があることを指摘した。

最後に本研究の限界について言及しておく。

本研究は、あくまでも中国語教育学会の学会誌『中国語教育』という1種類の雑誌に載っている論文タイトルについて分析したものであり、分析の結果が直ちに日本における中国語教育研究全体の傾向を反映しているものではない。日本における中国語教育研究全体の傾向を把握するためには、今後より多くの関連学術雑誌の情報を収集し、分析する必要がある。

また、今回は論文タイトルの言葉の特徴を分析したが、論文タイトルだけでなく、論文著者の属性(所属、専門)等も踏まえて、今後より詳細な分析を行っていく必要がある。

【参考文献】

- 安藤彦太郎(1988)『中国語と近代日本』岩波書店。
- 興水優(2005)『中国語の教え方・学び方—中国語科教育法概説—』日本大学文理学部。
- 佐久嶋研・佐々木秀直・田代邦雄(2012)「テキストマイニングの手法を用いた学会誌論文タイトルの時系列分析—日本神経学会誌「臨床神経学」の分析—」『医療情報学』32(6), 315-321。
- 日本中国語学会中国語ソフトアカデミズム検討委員会編(2002)『日本の中国語教育—その現状と課題・2002—』日本中国語学会, 好文出版。
- 樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版。
- 六角恒廣・横山宏(1975)『中国語への道』大修館書店。
- 六角恒廣(1984)『近代日本の中国語教育』不二出版。

【付記】

本稿は「第11届汉日对比语言学研讨会」(2019年8月24日～25日於西安外国語大学)で口頭発表したものに加筆修正を加えたものである。発表の際に賜った多くのご意見ご指摘に対し、この場を借りて深く御礼申し上げる。